

No.	号	執筆者等	思い
9	1988年11月号	小島清文	先の大戦に従軍した私たちの多くは、その戦争目的を「祖国のために」「親兄弟を守るために」、と漠然と考えながら第一線に赴いた記憶がある。そしてその第一線で、武器もなく、食料もなく、援軍もなく、国から全く見捨てられ、今日死ぬか、明日死ぬか、といういよいよ最後の土壇場に追いつめられたとき、多くの兵士たちは「国のために」というが、それは一体どういうことなのかと考え込んだものである。(中略) 戦前の我国の軍隊には、国民を守らなければならないという規定はどこにもなかった。それどころか、「軍の主とするところは戦闘なり。故に百時皆戦闘をもって基準とすべし」(作戦要務令要領)と言い、当時の軍首脳は「軍備は個人の生命、財産等の安泰を唯一の目的となすにあらず、国防のためにはむしろこれを犠牲になすこと少なからず」とさえ言いきっている。(機関紙不戦No.9、1988年11月)
9	1988年11月号	ゆりはじめ	戦争当時の国民学校初等科の児童たちは、疑似軍隊体験の中で育てられていたが最高の目標は「国家のために一身を捧げる」ことであった。国家意識を醸成させるための巧妙にしてしかも徹底した教育が行われた。私はその渦中であって死を賛美する教育を教え込まれた数少ない世代の一人である。(機関紙不戦No.9、1988年11月)
9	1988年11月号	武田逸英	…要するに、天皇はあの戦争の総指揮の立場にあったということです。政府や御前会議や、メンバーの顔ぶれはクルクル代わったけれども、天皇は変わらないのですからね。(中略) 裕仁天皇は目下苦しい病状ですが、過去のことがさまざまに去来しているかも知れません。その中で、多少とも反省の気持ちを出してほしい。そしてそれを何らかの形で示してほしい、と私は願っている次第です。(機関紙不戦No.9、1988年11月)
9	1988年11月号	山内武夫	…とくに、いわゆる軍の統帥権、天皇は直接この頂点に立っていた。ことに15年戦争の時期になると、超憲法的な御前会議や最高戦争指導会議が戦争指導ばかりか政治全般にわたって決定権を握った。天皇はその主宰者です。まさに絶対君主です。(機関紙不戦No.9、1988年11月)